

Japan-East Asia Network of Exchange for Students and Youths
Welcome



考えて、ひらめいて、発見する楽しさ。 聖徳学園独自の「知能開発」授業。

知能開発、ICT、グローバル。その新たなリンケージをめざして。



聖徳学園中学・高等学校

聖徳太子ゆかりの地を訪ねて
(中2 関西研修旅行 2月)



「和を以て貴しとなす」という聖徳太子の教えがDNAの聖徳学園。考える楽しさを発見する「知能開発」授業。タブレットや電子黒板をフルに活用するICT授業。グローバル人材の「根っこ」を作る多様なプログラム。多彩な個性は、その巧みなリンケージが育てている。



「知能開発」の授業



脳を活性化させ、考える器をつくる授業。
「知能開発プログラム」で生徒イキイキ！

幼稚園・小学校での「知能開発」が有名な聖徳学園。その成果を中学・高校にも広げようと、週1回、その授業が行われている。アメリカの心理学者キルフォード博士の知能構造理論に基づき知能因子を刺激する「知能開発」の授業。このカリキュラムは、英才教育で知られる聖徳学園小学校の校長・園田達彦氏によって構想された。生徒の考える力を伸ばすプログラム、それは知的好奇心を刺激し、創造力・問題解決能力を育成し、知能の器を大きくすることだが、中1・2のプログラムを見ると、「マッチ棒クイズ」や「オセロ」「コマ漫画」など、何とも考えることが楽しくなりそうだ。

教材はすべて独自開発。知能を高めることは、学力を高めること、卒業後の社会貢献の可能性を広げることに通じるという。私たちはふつう脳の約5%しか使っていない。ところがアインシュタインは約30%。めざせ！ 聖徳のアインシュタインというわけだ。

「体系的な『知能開発プログラム』として授業に取り入れているのは、おそらく全国でも聖徳学園だけではないでしょうか」と話すのは、入試広報部長の岩崎喜和先生。「中1・2は生徒一人ひとりの考える力を伸ばす授業です。中3・高1では思考力のフィールドを個人から社会へと広げていきます。中3は「時事問題」、高1は「国際理解」をテーマに考えていきます。さらに高2では、10人前後の少人数で小論文作成、ディベート、プレゼンテーションなどを行います。論理的・構造的な思考プロセスを身につけます」

そしてここで活躍するのが、タブレット端末や電子黒板といったICT。情報を入手し、共有し、発信するツールとして大いに活用されている。

ICT授業のさらなる進化と ユニークなグローバル教育への取り組み。

聖徳学園では、ICT LabやICT Roomなどの施設の充実の他、中学の全教室に電子黒板を設置し、電子教科書やインターネットを利用した授業を行っている。来年度は中1からタブレットを導入する予定。ほぼすべての授業がICTとかわりを持ち、よりクリエイティブなものになるようだ。

「学びのカタチが少しずつ変わって来たと思いますね」と岩崎先生は続けた。一方通行だった授業が、こういう道具を使うことで、双方のコミュニケーションへ幅が広がったと言う。調べる、考える、分かち合う、発表する。いろんなことをイメージしやすくなった。授業をわかりやすくし世界を広げていると、「こういうツールの使い方は、子ども達の方が上をいっている部分もあり、それが教員にもいい刺激になったりもしていますね」

そしてまた聖徳学園では、英語がわかるだけでは世界に通用しないと考え、ユニークなグローバル人材の「根っこ」を作る多様なプログラムを用意している。まず「日本を知る」をテーマに、中1では新潟で田植えを体験。中2では聖徳太子のルーツ、飛鳥や奈良・京都で歴史や伝統文化を理解する。次に「異文化を知る」をテーマに、中3でアメリカ研修旅行を。さらに高校では「ポータル社会を知る」をテーマに、さまざまな海外でのプログラムを用意。最近では特にアジアを中心とする新興国や途上国のことを学ぶプログラムに力を入れている。

「知能開発」授業とICT授業とグローバル教育の好リンケージ。それが「考える力」「自ら発信する力」をぐんぐん育てる。個性・創造性・国際性が教育方針の聖徳学園は、金子みすゞの詩の一節「みんな違って、みんないい。」学校です。



伊藤正徳校長

